


大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

人文学の研究はどのようにすれば
「見える」のか：人間文化研究機構
の取り組みを通じて

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
後藤真


1



2


今日の話

- 人文学はどのような研究を重要視しているのか？
- これまでのいくつかの取り組みを通じて
 - 人文学の「量」は何を見るべきか
 - 人文学の「質」は何を目指すべきか
- 評価のあるべき姿とは（私見）



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構


2



3


人文学が重視する研究

- 多様性
 - ex)江戸時代における千葉県の**村の財政に関する研究
 - 広がりが新たな新規性を生む
 - 学会等の広がりにおいても
 - 人文機構の研究教育職員264名で関連学会数が606
 - 結果的に分散し、見えにくくなっている
- 結果的に
 - 引用の速度の問題 特定の部分に限っては論文の生産サイクルの問題にも



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

3




4

人文学が重視するアウトプット

- 著書（特に単著）の重要性
 - 多様性の裏返しともいえる
 - 小さな成果を複数重ね、それを大きな理論へと転換する（分量が必要）
 - 社会的な展開を重要視
 - 「人」の動きを研究した結果はその対象となった「人（≠特定個人）」に向けてより直接的に還元されるほうが望ましい
 - 結果的には言語も自国語になりがち
 - 人文機構の書籍内論文数と学会等論文数の比率（論文／書籍）

歴博	1.25	国文	2.08	国語	0.70	日文	1.70	地球	0.49
民博	1.14	（概数）							



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

4

論文の量的評価

- 特別促進研究「研究力を測る指標」（代表・小泉周）にて
 - 2018年3月に報告書を作成
 - 基礎データとともに公開済み
- 人文社会系に限っては
 - 著書の位置付け 言語の問題 引用の問題などを指摘
 - 総じて根本となるデータ量の不足などを指摘

大学共同利用機関連合 人間文化研究機構

5

人文系で書籍の量的位置

- 書籍の中の論文数を雑誌の論文数とあわせて見る

書籍内論文数	雑誌論文数	科研費取得件数順位	書籍	雑誌	科研費件数順位
239	326	1	508	26,651	1
151	90	2	465	19,413	3
119	168	3	374	17,088	2
82	93	15	306	14,813	5
56	67	4	233	10,146	4
55	35	14	220	10,444	7
54	74	5	207	10,644	6
51	85	-	151	6,957	10
48	56	11	148	6,731	15
46	68	7	137	5,073	20

Scopusのデータを科研費分類に再分類した後の史学
参考：同条件の生物科学

大学共同利用機関連合 人間文化研究機構

6

論文の被引用期間の長さ

- (リポジトリでの) 情報系の論文にて引用する論文は50%が5年以内のもの
- 歴史学・文化人類学・言語学等の論文で5年以内の論文は全体の25%程度
- 国文学では全体の約25%、民俗学にいたって約35%については30年以上前の論文の引用である

→引用の分析の期間をより長くとの必要性

n年以内の論文引用割合 (暫定版)
人間文化研究機構リポジトリ及び関連する学術雑誌916本の論文より31933本の引用を抽出

大学共同利用機関連合 人間文化研究機構

7

量的計測は人文社会科学の研究力を反映していないか？

- 反映している
ただし：
 - 著書をどう考えるか？
 - 分野や言語圏の大きさをどう考えるか？
 - 資料集やデータの公開などをどう見るか？
 - 引用の年数をどう考えるか
 は全体として考慮する必要がある

→「国際共著書籍」などは国際化の指標としては重要である可能性が
→翻訳されたものの広がり→例えば日本における韓国研究が日本語で論文になり、英語で論文になり、韓国で本になると、日本の人社系の研究プレゼンスは大きいと言えるデータの把握

大学共同利用機関連合 人間文化研究機構

8

人文機構のとりくみ 論文の質的評価としての「サイエンスマップ」

- 単純に量的処理だけでは比較ができない多様性を表現するために
- 論文の中からキーワードを抽出し、一定の傾向をみる→研究の傾向を導き出す
 - (機構のリポジトリからOAI-PMHでハーベスティング+クロール→論文データからキーワードを抽出)
 - クラスタリングを行い可視化する

大学共同利用共同研究センター 人間文化研究機構

9

論文の記述内容に着目した、解析とマッピングによる人文研究の成果表示システムの構築 (人文系サイエンスマップ)

ねらい

- 人文系の研究成果を可視化すること
- 特に量ではなく、その質と多様性に注目
- これまでと異なる「研究世界」の創出

手法

- 人文機構のリポジトリにある論文(約15000本)をクロールしスキャン
- テキストデータをもとに類似の用語をクラスタリング
- クラスタリングしたものを平面上におとしこむ

※ある検索キーワードを入れ、そのマップを表示

例1：鹿児島・方言で検索

機関別クラスタリング表示 (横軸：年代 縦軸：機関)

- 国語研(上から3つ目)は2000年代後半から関連性の強い研究を集中的に出している
- 民博(上から4つ目)は中心的地域の言語研究がコンスタントに行われる
- 日文研は2000年前後に多く研究があるが、近年はあまり対象としていない

分野別表示 (縦軸：研究分野 縦軸：機関)

- 国語研(赤)は言語学に集中した研究である一方で日文研(ピンク)の分野は広い。
- 民博・歴博(青)は言語と歴史の両分野にまたがる

例2：東アジアで検索

論文1件ごと分割表示 (3機関のみ・縦軸：分野 横軸：年代)

- 歴博は歴史中心(濃い青)
- 日文研も歴史が多い(青緑)
- 民博は分野横断型(赤)

詳細分野別表示 (6機関) 機関全体では2000年代後半から、より広い分野を対象とした研究が増えている

特徴

- 研究の傾向が年代別・機関別・分野別などから分析
- 膨大な論文の書目引用等ではない、研究の広がりをつなぐをあまりにリポジトリへのリンクもあるので、リポジトリのマップ上検索システムとしても利用可能
- クロールは他大学等のものも可能であり、今後は他大学等との関係性分析などを実施予定

大学共同利用共同研究センター 人間文化研究機構

10

課題

- 今後はいくつかの大学と議論できる場を考えたい
- 質的データの比較がある程度容易なサイエンスマップ
- ただし、書籍が難しい!
- 研究者情報によるものはまだない
- 地域的特性・文理融合型・地域へのインパクトなど

大学共同利用共同研究センター 人間文化研究機構

11

論点

- この結果から何を見なければならぬか→評価を含む可視化はあくまでも「道具」
 - このデータをもとにした「戦略」につなげてこそ意味がある
 - この前提の上で
- 自然科学と同一のクライテリアの評価軸は必要か
- 機関間で測れるものが必要か
- 短期的に中期的に長期的に

大学共同利用共同研究センター 人間文化研究機構

12

今後への重要な課題

13

- 成果の電子化→根本的にデータが不足している
 - 書籍も含めた論文データベース整備の重要性→自己申告ではなく、外的に分析可能にするためにも
 - 学会などでやれることもあるのではないか？ 国際性
- 引用されているものの対象は何か？
 - 人社が重要としている価値のある仕事とは何か？
 - 例えば「引用」としてひいている「資料」をどのように評価するか
 - 分野の「大きさ」の問題→重要
- Output以外の「質」をどう見るかも今後の課題
- ただし、人社でも計量による研究の強みは見える
 - データがないだけ

13

評価のあるべき姿として

14

- 本来はある目標に対して「何を達成できているか」という自らのアセスメントとして
- 現在、達成できてなくても良い→「何ができていないか」を考えるための道具であるべきではないか
- 評価の単純な未達成をネガティブに捉えないような考え方が必要ではないか（ライデン声明とともに）

14